

異文化融合

Cross-cultural fusion



中島昭彦*

今年のゴールデンウィークは10連休らしく、巷では旅行代理店の広告宣伝が活発です。TVCMを見ながら、今年のゴールデンウィークも出力抑制かと頭を過りましたが、突然、家内から今年はどこにも行きたくないと通告されました。

原因は私にあるようで、目的地や行程も勝手に決めて計画通り旅行するだけで、楽しくないと言うのです。家内からすると、計画通りに行かなくても途中でどこかに立ち寄ったり、無駄な買い物をしたり、予定外の散策をしたりと、旅行の経過を楽しみたいのに、私は会話も上の空でカーナビとにらめっこし、スマホの観光情報ばかり調べていて、つまらないと。私としては、貴重な休みなので家族にとって充実した旅行になるようにと、綿密に計画を立てるのですが、それが気に入らないらしい。計画段階から迷いながらも、あーだこーだと一緒に考えたいと言うのが家内の意見です。会社の同僚や部下もきっと同じように思っていると嫌味を言われ、一冊の本を渡されました。

著書によれば、目標指向型の男性の行動特性と、状況対応型・プロセス重視型の女性の行動特性を対比し、共同生活をしつつも家庭内での双方の思いの違いが赤裸々に記述されていました。夫はお酒やギャンブル、遊興、女性等に関わる問題もなく熱心に仕事をして、家族に対しても良かれと思い生活してきただけなのですが、突然妻から熟年離婚を通告されるケースが増えてきているとのこと。家内の言い分では、私も正に当てはまるらしいです。男性と女性は異文化の対極の一つと言えますが、当家はその融合（旅行の楽しさの共感）にほど遠いことを痛感しました。

再生可能エネルギーの開発に携わる者として、今更のように社会への実装や普及の難しさを感じます。安くて良いものを創れば、良いのか？元が取れば、良いのか？安心できれば、良いのか？家内の指摘通り、ルールは大きく変わって来ているように感じます。

作り手は、開発する技術の先進性や訴求点、競争力等を分析し、実現に向けての計画やマイルストーンを設定し、資源投入を行い実現を目指します。開発目標を達成したものの持続的な普及への道は長く、逆に色々な課題が出現します。

再生可能エネルギー普及のためのインセンティブやコスト、便益等をうたっても市場の真の反応は硬く。本当の相手は誰なのか？もう少し社会や市場の声を聞くべきなのかもしれません。再生可能エネルギーの作り手側からの価値観だけでなく、導入側としての社会の都合や思いも取り込んだ社会実装を目指すべきなのかもしれません。また、たとえ現在では不完全であったとしても導入側と共に考え、持続的な道を模索すること自体が重要なかもしれません。

2014年4月から「建材一体型太陽電池（BIPV）に関する国際標準化（経済産業省委託、PVTEC受託）」で、BIPV国際標準化調査委員会の主査を担当する機会を頂きましたが、同委員会は大学や国立研究所、規格審議団体、試験機関、建設会社、建築設計、ガラスメーカー、サッシメーカー、部材メーカー、PVメーカー等を含む異業種の方々と構成される委員会、ZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）やZEH（ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス）の実現を目指す中で、BIPVのニーズや普及阻害要因、普及拡大のための標準化等について議論されております。

建築物の表情であるファサード・建物垂直壁面での意匠の重要性や近隣建物への光反射対策、開口部設置BIPVの断熱性の要求、建築部材相当の耐用年数等、通常のPV開発では接することが出来ない市場要求を実感しました。また、建築ではPVパネルの常識でもある強化ガラスの採用を敬遠することもお聞きし、目からウロコの思いがありました。ガラス中の不純物の一つであるNiSを原因とした自然破損を回避するために、強化ガラスは採用したくないとの顧客要求があるとのことでした。PV開発の常識が通用しない異文化からのこうしたニーズは、新しいモノづくりへの野心をくすぐるには十分な材料であり、BIPVを異文化融合の象徴とし、皆で持続的な社会実装の実現につなげたいとの思いを強くしております。

さておき、一個人としては、持続的な夫婦関係の実現を目指すことが最重要課題であることは言うまでもありません。

* (株)カネカ PV & Energy management Solutions Vehicle BIPV 事業開発グループリーダー